

地元の工芸品

鼈甲柄の織物（亀甲織り）と雫石麻の会

日本には織り物の伝統があり、さまざまな織り物が全国で見られます。最も珍しい亀甲織は雫石から来ています。この複雑な織り方は、地元で栽培された麻の植物を生地にした織物に用いられています。この名前は、生地に作られた亀の甲羅に似た、六角形の模様が浮き出ていることに由来しています。

全盛期（19 世紀後半から 20 世紀前半）でも、時間と技術が必要なため、この地域ではあまり行われておらず、技術を習得している女性も限られていました。20 世紀に入ると、他の素材を簡単に作ることができる製造方法が導入されたため、「亀甲織」は衰退していましたが、最近になって再興の努力がなされ、このユニークな伝統が見直されています。

1968 年、地元の 2 人の女性、加藤キワさんと加藤ミツエさんが協力し、キワさんの若い頃の経験に基づいて、亀甲織りの再現に取り組みました。ミツエさんは雫石で工芸品を復活させるためのさらなる努力を主導し、雫石での復活に向けて、関心のある市民と一緒に研究会を立ち上げ、伝統的な技術を用いて糸を作るための麻を栽培しました。

ミツエさんは 1985 年に設立された「亀甲織り研究会」の初代会長を務め、1988 年に「しずくいし麻の会」と改名されました。2005 年には重要伝統的工芸品に指定されました。しずくいし麻の会の現在のメンバーは、彼女たちのスキルを維持し、受け継いでいます。当協会会員の方が雫石を訪れる人々に実演を行い、一緒に亀甲織りを体験することもできます。

かつて、亀甲織りの主な用途の 1 つは、「汗はじき」と呼ばれる下着でした。生地は汗を吸収するのに適しており、暖かい季節を快適に過ごすことができました。これは、農民が大多数を占めたこの地域では大きな利点です。雫石歴史民俗資料館では展示されている汗はじきの一例を見ることができます。亀甲織は鎌倉時代（1185 年～1333 年）から明治維新（1868 年）まで、東北地方の大部分を支配していた南部家にも献上されていたといわれるほど、質の高い織物です。

亀甲織りの貴重な特徴として腰機の仕様が挙げられます。日本のほとんどの地域では、腰機は、19 世紀後半に登場した使いやすい床織機に置き換えられました。腰機を使用する場合、完成した布の中を縦に走る縦糸を、織り手の体に直接縛り付けます。つまり、縦糸の

上に横糸を織り込む際に、織り手が張力をコントロールすることで、丈夫でしっかりとした布を作ることができるのです。体全体を使って織るため、体力と高度な技術が求められます。

今日、しずくいし麻の会では、雫石農業トレーニングセンターで地元住民や来場者を対象にデモンストレーションやワークショップを行っています。糸を作るために麻の栽培から始まり、全て手作業で行われています。麻を摘んだ後、麻の会の会員は葉を取り除き、茎を乾かす前に蒸します。次に、前年に出た麻の端材を発酵させた液に麻を浸します。これで表皮が剥がれやすくなり、乾燥させることができます。最後に、繊維を撚り合わせて糸を作り、天然素材を使用して染色して初めて織物として織り始めることができます。

しずくいし麻の会は、実用的で装飾的な手作りの亀甲織りのアイテムを製造・販売しており、ギフトやお土産に最適です。しおり、鞆、テーブルランナー、ランチョンマットなど、雫石駅にある雫石町観光物産センターをはじめ、いくつかの場所で購入できます。デモンストレーションを見たり、亀甲織りを試してみたいという方は、事前に観光農産物センターでご予約ください。